



Data

監督・撮影・編集: 王兵 (ワン・ピン)

出演: ヤーパ/馬健 (マー・ジェン) / 馬殿栄 (マー・ディエンロ) / 陳軒元 (チョン・ジュアンユエン) / 尹天興 (イン・ティエンシン) / 朱小宴 (ジュー・シャオイエ) / 馬雲徳 (マー・ユンドー) / 蒙友蓮 (モン・ヨウリエン) / 伍申松 (ウー・シェンソン) / 普成義 (プー・チョンイー)

👁️👁️ みどころ

賈樟柯 (ジャ・ジャンクー) 監督もすごいが、王兵 (ワン・ピン) 監督もすごい! 彼のドキュメンタリーは必見だが、長いから大変!

そのうえ、本作のテーマの「重さ」は生半可ではない。さて、あなたはその行(ぎょう)に耐えられる・・・?

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■ ■ 賈樟柯監督VS王兵監督 ■ ■

6月9日に観た『罪の手ざわり』(13年)は、中国第六世代を代表する賈樟柯(ジャ・ジャンクー)監督の作品。それも含めて、賈樟柯監督作品はどれもすごいが、『鉄西区』(03年)、『シネマルーム5』369頁参照)をはじめとし、『無言歌』(10年)、『シネマルーム28』77頁参照)、『三姉妹〜雲南の子』、『シネマルーム30』184頁参照)、と続く王兵(ワン・ピン)監督作品もすごい。

1970年生まれの賈樟柯と、1967年生まれの王兵は同世代だし、「我が道を行く」という「生き方」も全く同じだが、その作風は全く異なり、王兵はあくまでドキュメンタリー作品にこだわっている。そんな王兵監督の最新作が、①ベネチア国際映画祭特別招待作品とされ、②ナント三大陸映画祭準グランプリ(銀の気球賞)とされた本作。本作は前編122分、後編115分、計237分と長尺だが、王兵作品となれば、そりゃ必見! 勇んで試写室へ出かけたが・・・。

■ ■ 精神病患者の増大をどう理解すれば・・・ ■ ■

私は何度か看護師の仕事として精神病院の中に入ったことがあるが、ハッキリ言ってあま

り気持ちのよいものではなかった。日本でも精神疾患の患者は増える傾向にあるが、「中国では精神病患者が1億人を超えたと言われて久しい」というからすごい。プレスシートの中で、王兵監督は2003年の秋到北京近郊の精神病院の中に入ったことがきっかけで精神病院に興味を持ち、撮影の交渉をしたと書かれているが、なぜ王兵監督は精神病院にそんなに興味を持ち、精神病院の内部をドキュメンタリー映画の対象にしたのだろうか？

彼の問題意識はきっと、プレスシートに書かれてある、「彼らの日常生活の繰り返しは、時間というものの存在を増幅させる。時間が止まるとき、そこに人生が現れる。」ということなのだ。それはそれで素晴らしい問題意識だが、私にはちょっと・・・。

■□■唯一無二のカメラ＝“ワン・ビンの距離”とは？■□■

王兵監督が3カ月ほどかけてほとんど一人で撮影したという病院は、雲南省北西部の昭通市にある約200名以上を収容する精神病院。王兵監督作品らしく、本作も何の前触れもなく、冒頭からいきなり病院の中に収



○ Wang Bing and Y. Production シアター・イメージフォーラムほか全国順次公開中
配給：ムヴィオラ

容されている、ヤーパ、馬健（マー・ジェン）、馬殿榮（マー・ディエンロン）等の姿が映し出される。しかし、ハッキリ言ってその生活ぶりは汚いし、各自の動きはノロい。したがって、そんなスクリーンをずっと見続けているのはハッキリ言ってしんどい。

収容患者（入院患者）に与えられているのは1台のベッドだけで、テーブルもタンスも何もない。また、トイレは外にあるものの、簡単に済ませるための洗面器（？）がベッドの下に置かれているから、それを使っている人もいるが、そんなシーンをスクリーン上に映し出されても……。さらに、ドキュメンタリー作品だから、裸になっての着替えシーンもあるが、ハッキリ言ってそんなシーンは観たくもない。プレスシートには「誰も真似できない唯一無二のカメラ＝“ワン・ビンの距離”が、またしても新たな傑作を生み出した。」と書かれているが、そんなシーンを見続けるのは、とにかくしんどい。

■□■ある意味、この鑑賞は行（ぎょう）かも・・・？■□■

スクリーン上では、食べ物を奪い合う男たちの風景、注射をねだる男の風景、罰として後ろ手に手錠をかけられた男の風景、男同士でベッドを共にしようとする男の風景、等々

が次々と映し出される。これらをカメラで追いかけて、一本の作品に仕上げるのが王兵監督の仕事だということはよくわかるが、私にはこれらのシーンが『無言歌』や『三姉妹～雲南の子』のような社会問題提起に容易に結びつかないため、その意味でもこれを見続けるのはしんどい。試写室の数人の男性客も私と同じと見えて、約2名は寝息をたてながら居眠り状態にあった。

「起承転結」もなく、クライマックスもないまま、精神病院の入院患者たちの生活ぶりが延々と描かれる中で前編が終わったが、仕事の都合もあり(?)私の鑑賞はそこでジ・エンドに・・・。

2014(平成26)年6月20日記

パンフに見る中国の精神病事情

本作のパンフレットには興味深い「REFERENCE」が載っているので、それを下記にそのまま引用しておく。

記

中国の精神病患者1億人超え

2009年に中国当局の精神衛生センターが発表したデータを引用し、2010年6月、新華社系列の「瞭望週刊」誌が「中国の精神疾病患者は1億人を超えている」と報道。多くの中国メディアが轉載して大きな話題となった。実際には、患者総数は公表された数字を上回る可能性があると報道するメディアもあり、精神病患者による殺人事件が頻発していたことから、この問題が中国社会の安定を脅かすという指摘もあった。「瞭望週刊」誌は、価値観の混乱や喪失、貧富の格差の拡大といった社会の変動が、大量の精神病患者の要因であるとし、世界保健機関(WHO)も、中国では現在、精神病が心臓病やがんを上まわる大きな問題となっていると指摘した。

2013年に初めての「精神衛生法」施行

中国の「精神衛生法」は、1985年に起草以来、27年もの間実現されていなかったが、2012年10月の全人代でようやく可決。翌13年5月より施行された。同法第30条に「精神障害者の入院治療は患者本人の意思を尊重すべきである」と定められ、本人の同意なしに家族などが施設に送り込むことは違法行為と見なされると明文化された。だが一方で、重篤な精神病患者で、自分自身(自殺)や他人に危害を与える場合は強制的に入院させることもありえる、という余地が残され、一部メディアでは現在の政治体制下では、この法の実施に対して期待できないという意見も多い。

2014(平成26)年10月10日